

第 617 回：自己紹介 (DM)

みなさま、こんにちは。LA 毎週月曜 14 : 00~17 : 00 担当、DM と申します。

今回は、2026 年度の私の最初の LA 通信ということで、簡単に自己紹介をしていききたいと思います。

私は現在、この外大の大学院の博士(後期)課程に在籍しています。専門は帝政末期のロシア・リアリズム文学です。LA(ラーニング・アドバイザー)としては、上記の通り、毎週月曜、14 時から 17 時まで、図書館のラーニング・コモンズにて、学習相談を受け付けております。ちょっとした相談事でも大歓迎です。お気軽にお越しいただけますと幸いです。この一年間、どうぞよろしく願いいたします。……

では、ここからは、今年度の LA 通信の執筆者としての自己紹介を行っていきます。

今年度の LA 通信において、私は、基本的なレポートの書き方について、みなさまにご紹介していききたいと思います。

多くの外大生は、学期末になるとレポート課題を提出し、卒業年度になると、卒業論文を提出することになります。レポート、および論文には、誰もが最低限は守るべき、基本的な書き方というものがあります。どんな目的でレポートを書くにしても、自分の書いた文章が「レポート」と呼ばれるためには、その文章が、然るべき方法に従って書かれている必要があるのです。

その方法は、一般的には、「アカデミック・ライティング」と呼ばれています。そして、その大まかな手順は、大学生であれば誰にでも応用できるように、かなり単純化されています。今年度の LA 通信でみなさまと情報を

共有していきたいのは、まさに、そのような方法についての情報なのであります。

とはいえ、方法が単純化されているとは言って、それを実践するのも簡単だと考えるのは、まったくの誤解です。方法を知ることと、それを実践することは、全く別のことです。方法としてはそんなに複雑ではない筈なのに、それを実践するのは難しい。よくある話ですが、これは学問の場合でも同じなのです。方法を知りたければ、自分で本を読めばいいし、方法を身につけたければ、苦勞して自分で実践するほかない。

まさにその点に、私の LA 通信の特色があります。今年度の LA 通信では、私が説明したレポート執筆法に則して、私自身が、この連載を通して、一本のレポートを作成していく、というアプローチをとっていきます。すなわち、方法を教えるだけでなく、その方法を私が身を以て実践してみる、というわけです。

もちろん、私がここでレポート執筆を実践したところで、みなさまがレポートを作成する難しさが取り除かれる、というわけではありません。ですが、私の LA 通信を読めば、レポートの書き方を知るだけではなく、それを実践することのどこが難しいのか、私という人物を介してではありますが、いくらかは知ることができます。つまり、失敗して恥をかくことは覚悟の上、というわけです。……

というわけで、今回の LA 通信はここまでです。次回は、レポート執筆法の説明に先立ち、大学生がレポートを書く意義について、説明していききたいと思います。みなさま、何とぞよろしく願いいたします。

第 617 回：自己紹介 (DM)

参考文献（本連載で使用する情報は概ね以下の文献に依拠しています）

ウンベルト・エコ（谷口勇[訳]）『論文作法：調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房、1991年：N801.6==28、書庫 1F（開架）

木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、1994年：N080=30=7-1-1、閲覧室入口正面

小熊英二『基礎からわかる論文の書き方』（講談社現代新書；2660）講談社、2022年：K2660、閲覧室入口正面

澤田昭夫『論文の書き方』（講談社学術文庫）講談社、1977年：N080=21=153、書庫 1F（開架）

戸田山和久『論文の教室：レポートから卒業まで』（NHK ブックス, 1272; 最新版）、2022年：N816.5==140、閲覧室入口正面